

補助事業番号 2022P-279

補助事業名 2022年度 ギャンブル等依存症に係る研究事業 補助事業

補助事業者名 人間環境大学 講師 横光健吾

1 研究の概要

本研究では、ギャンブル行動の抑制を狙ってスマートフォンアプリケーションを通じたギャンブル渴望に対する即自的なデジタル治療の効果を検討することであった。その結果、現状のスマートフォンアプリケーションの効果については、使用するかどうかで、ギャンブル行動に大きな影響を及ぼすかどうかは不明であり、その効果を明らかにすることはできなかった。しかしながら、スマートフォンアプリケーションの改善をしながら、本研究を予備的研究と位置づけ、今後さらなる研究が必要である。

2 研究の目的と背景

厚生労働省の報告では、ギャンブルの問題を感じ始め、精神科やクリニック等の医学・臨床心理学的サービスを利用する者は0.5%に過ぎない。この治療ギャップの解決は、人々のメンタルヘルス向上において極めて重要である。従来の精神科等で提供されている対面式の治療ではなく、本事業で効果検討を行うスマートフォンアプリケーション(以下、スマホアプリ)を通じたギャンブル渴望に対する即自的なデジタル治療は、これまで治療を受けずにいたギャンブルの問題に直面する人々への重症化予防、及び臨床的問題の低減につながる可能性を秘めている。

本事業は、ギャンブル依存症の重症化予防に資するスマホアプリの効果検証を目的とする。具体的には、これまでの対面式治療ではカウンセリングルームで対処スキルを学ぶだけであったが、本事業では、ギャンブルに関連する問題に直面しているギャンブラーを対象に、スマホアプリを用いて、ギャンブル渴望が生起するまさに「その瞬間」に、渴望の回避、及び対処方法に関する手がかりを即時的に提供することで、ギャンブル行動の抑制を狙うものである。本臨床心理学的な効果検証を厳格に行うため、無作為化比較試験によって、その効果を検証する。

3 研究内容

https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/detail/259114/ec8c92519529a79271a2f26709dc99eb?frame_id=483266

(1) ギャンブル行動の抑制を狙ったスマートフォンアプリケーションの効果検討

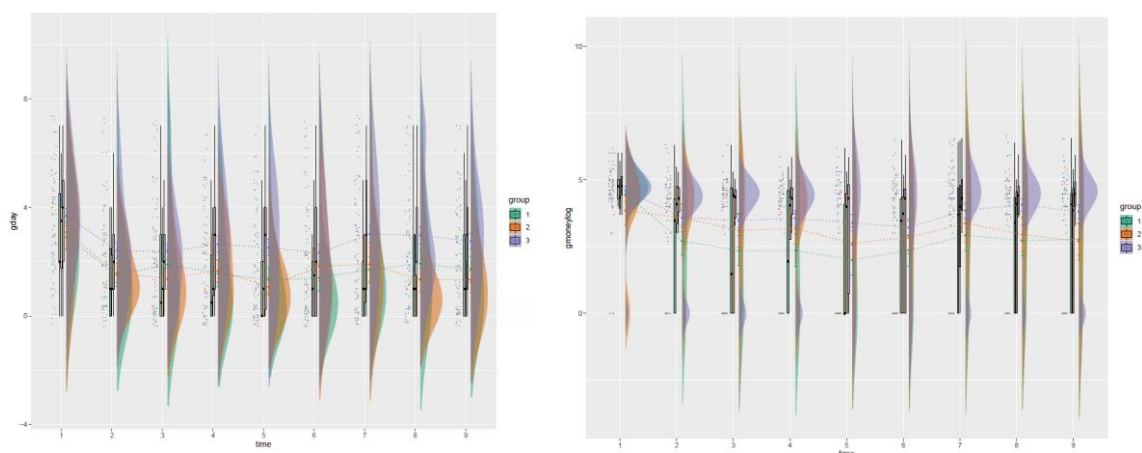
本事業は、人間環境大学研究倫理審査委員会の承認を得たうえで研究を実施した(承認番号22人環大第212号)。また、参加者への倫理的義務を考慮し、WHOのプライマリ・レジストリとして認められたUMIN臨床試験登録システムへの研究情報の事前登録を行った(UMIN試験ID UMIN000043270)。

ギャンブル依存症の重症度を測定することのできるProblem Gambling Severity Indexを用いて、

3点以上のギャンブル依存症の問題に直面していると判断された20歳以上の174名の募集を目標として研究を実施した。2023年1月6日から募集を開始し、2023年3月31日までに、76名の募集を行うことができた。

本研究の主要アウトカム指標の解析には線形混合モデリングを用いた。線形混合モデリングが選択された理由は、欠損データへの対応に優れており、解析にランダム効果を組み込むことができるからである。解析では、従属変数をギャンブル日数とし、独立変数を割り付け(カテゴリー変数:アプリ群、アプリ+簡易面接群、アセスメント群)と時間(カテゴリー変数:ベースライン=[T1]、各フォローアップ=[T2-T9])とし、各時期の比較を実施し、参加者をランダム効果変数とした。同様の解析を、ギャンブルに費やした金額、ギャンブルの症状を従属変数として解析した。線形混合モデリングを用いた解析の前に、各期間におけるすべてのアウトカム指標のデータについて正規性検定を行い、正規分位数-分位数プロットを用いてすべての変数が事実上正規であることを確認した。ギャンブルに費やした金額を除くデータは、プロットグラフがほぼ直線になることから、正規分布の要件を満たしていた。しかし、ギャンブルに費やした金額の正規分位数-分位数プロットは、プロットグラフが直線でなかったため、対数変換を行った。対数変換を行う際、無回答のデータや0と回答したデータの前処理として、ギャンブルに使った金額のデータに10を加えた。

解析の結果、参加者の各測定時期のギャンブル日数とギャンブル症状について、統制群とアプリ群との間に差異は認められなかった。一方、ギャンブルに費やした金額について、介入後に、アプリ群と統制群との間で統計的に有意な差異が認められた($t(581.68) = -2.145, p < 0.05$)が、フォローアップ期間にそのような差異は認められなかった。以下の図において、緑がアプリ群のデータ、橙がアプリ+簡易面接群のデータ、紫が統制群(アセスメントのみを実施)のデータである。



4 本研究が実社会にどう活かされるかについての展望

本事業を予備的な研究として位置付けるのであれば、今後はスマートフォンアプリケーションをより洗練させ、参加者を大規模に集めて実施することで、スマートフォンアプリケーションの効果を示すことが可能である。

5 教歴・研究歴の流れにおける今回研究のいちづけ

本事業はこれまでに申請者が実施してきた研究の中でも、チャレンジングな研究であった。ギャンブル行動というコントロールの難しい嗜癖行動に対して、専門家を介さない、スマートフォンアプリケーションによってその効果を検討するものであった。本事業では十分なサンプルサイズを収集することはかなわなかったが、今後も引き続いて関連研究を実施する予定である。本事業を足掛かりとして、ギャンブル依存症領域において、世界にもインパクトを残す可能性を含んだ研究を開始することができた。

6 本研究に関わる知財・発表論文等

特記事項無し

7 予想される事業実施効果

今後より本事業を洗練させた研究を実施し、本事業で効果を検討したスマートフォンアプリケーションをgoogle play等で利用できることで、より多くのギャンブル等依存症の問題に直面している方々の生活を向上させることができる。

8 補助事業に係る成果物

(1)補助事業により作成したもの

特記事項無し

(2)(1)以外で当事業において作成したもの

特記事項無し

9 事業内容についての問い合わせ先

所属機関名: 人間環境大学総合心理学部(ニンゲンカンキョウダイガクソウゴウシンリガクブ)

住 所: 〒790-0825

愛媛県松山市道後樋又9-12 人間環境大学総合心理学部

松山道後キャンパス

担 当 者: 講師 横光健吾(ヨコミツケンゴ)

担 当 部 署: 総合心理学部(ソウゴウシンリガクブ)

E - m a i l: k-yokomitsu@uhe.ac.jp

U R L: <https://www.uhe.ac.jp/>